

平成 30 年度大学入門ゼミ実施報告書

教育学部 学校教育教員養成課程

平成 30 年度「大学入門ゼミ」実施報告書

松下 幸司（教育学部附属教職支援開発センター）

（1）実施の概要

平成 30 年度の大学入門ゼミは、7 クラス編成（1 クラスあたり学生 24 名×3 クラス+23 名×4 クラス）で実施した。全学共通コンテンツについては 164 名を 2 クラスに分けて実施した。教育学部学校教育教員養成課程においては、1～7 組の授業教室が前期「大学入門ゼミ」のみならず、後期実施の「教職概論」（学部実地教育科目）までを通して“ホームルーム教室”となるよう、講義室調整を行った。併せて、担任教員の学生指導のクラス間連携を図るとともに、学生にも初年次教育の一体感・一貫性を感じさせるため、ホームルーム教室となる講義室を、中庭を取り囲む 4・5 号館 2 階にクラス番号順に並ぶよう集中配置して実施した（1 組 421・2 組 423・3 組 427・4 組 428・5 組 523・6 組 522・7 組 521）。本学部学校教育教員養成課程における平成 30 年度「大学入門ゼミ」のスケジュールは、表 1 のとおりである。

表 1 教育学部学校教育教員養成課程「大学入門ゼミ」スケジュール

回	実施月日（曜日）	授業内容の概要
1	4 月 16 日（月）	オリエンテーション・授業説明 学生憲章と大学生としての自覚 [全体指導]
2	4 月 23 日（月）	小豆島 一日研修 事前指導
3	4 月 28 日（土） or 29 日（日）	小豆島一日研修 「二十四の瞳」 出会い学習 [7 クラスを 2 班に分け、日帰りで実施]
4	5 月 1 日（火）	【共通コンテンツ】 情報整理の方法
5	5 月 7 日（月）	【共通コンテンツ】 レポートの書き方
6	5 月 14 日（月）	【共通コンテンツ】 日本語技法
7	5 月 21 日（月）	【共通コンテンツ】 プレゼンテーションの方法
8	5 月 28 日（月）	学校参観 事前指導 [全体指導]
9	6 月 4 日（月）	小学校参観（附高小・附坂小）
10	6 月 11 日（月）	小学校参観振り返り/幼・中参観に向けて [クラスごと]
11	6 月 18 日（月）	学校教育入門 授業の基礎基本 [全体指導]
12	6 月 22 日（月）	幼稚園・中学校参観（附幼・附幼高松園舎・附高中・附坂中）
13	7 月 9 日（月）	学校園参観振り返りと発表計画 [クラスごと]
14	7 月 20 日（金）	「大学入門ゼミで学んだこと」 発表準備 [クラスごと]
15	7 月 23 日（月）	「大学入門ゼミで学んだこと」 発表・まとめ

本学部学校教育教員養成課程における「大学入門ゼミ」の特徴として、「二十四の瞳」との出会い学習を組み込んでいることを挙げることができる。第1回授業の際、学生に挙手を求めたところ、「二十四の瞳」の小説を読んだことのある学生は殆どいないようであったが、県教委の教員募集パンフレットにおいて触れられていたり、「二十四の瞳」に登場する岬の分教場が小豆島に着任した新任教員の研修の場として使用されたりするなど、いまだ香川の教育において「二十四の瞳」の包含する価値は大きい。本授業の一部に組み込んでいる小豆島での一日研修やその事前指導を通して、未来の教師を目指す1年次学生に、教師への憧れや教育への情熱を「二十四の瞳」との出会いを通して醸成させたいと考える。本活動は、地域に根ざした取り組みであると共に、地域に誇りを持って活動する学生を育成することにも繋がると考えている。

2年前の平成28年度、「大学入門ゼミ」の全学教員に向けたFD授業公開を本学部学校教育教員養成課程が担った。その際、今後の大学教育改善の方向性の1つである“アクティブ・ラーニング”を志向し、これまでの大学入門ゼミにおける学びを各クラスで振り返る授業回(第13回)を公開授業として設定して、学生が「大学入門ゼミ」12回の授業における学びの成果を相互交流する学習活動場面を位置づけた。このプログラムを継続・改善し、平成30年度においても、1～7組のクラス別に、実施のねらいや実施方法などを担任教員間で共有し、全クラスにおいてアクティブ・ラーニング型の授業を実施した。学びの成果を相互交流する学習活動場面においては、各担任教員が主体的に授業実施の工夫を行い、{ワークシート、ホワイトボード、付箋紙と横造紙、付箋紙とホワイトボード}など、個々のクラスでバリエーションのあるツールの活用と交流手法によって、学びの成果を相互交流する学習活動を実施することができた。

(2) 学生アンケート(共通コンテンツアンケート)結果についての所見

平成26年度の学生アンケートに、レポートの書き方をもっと早く実施してもらいたいとの希望が多かったことから、平成27年度以降1か月ほど前倒しし、大学入門ゼミ前半において授業を実施している。そのレポートの書き方に関して、学生アンケートには「レポートの書き方を学んで、他の講義のレポートもなんとなくで書くことがなくなり、きちんと書けるようになった。」「基礎の基礎からレポート作成方法について学ぶことが出来た。そのため、他の授業でのレポート作成の際にとっても参考になった。」「レポートの書き方では、どのように書くのか不安だったので教えてもらえてよかった。何度かレポートを提出する機会があったが、その回のプリントをもとにレポートをかくことができた。」「大学に入学してからレポートを書く機会が急激に増えて困惑したが、丁寧に基礎的なことから講義していただいたので、初めてのレポートも困らなかった。」「大学に入ってから始めてレポートを書くようになり、何も分からなかったが大学入門ゼミを受けたことで、レポートの書き方や、日本語技法が学べ、社会に出た時に役立つ知識のひとつとなったのが良かった。」「大学に入って初めて取り組むレポートというものの書き方がわかってとても助かりました。引用の仕方がわかりやすく説明されたのでもうすっかり自分のできるようになりました。」など、高校生までとは異なる“大学生としての学び方”のスキル

アップの基礎を培うことができたとともに、自分でできる達成感を感じ、将来に繋がるスキルとしての価値づけを促すことができたと思われる。

加えて、学生からは「ただスライドを作って発表するのではなく、誰に何を伝えるのかということを考えることが大切なのだと、ペアで実践をしてみて感じました。プレゼンテーションにかかわらずこれからあらゆる面でこのことを大切にしたいです。」「プレゼンの授業では学生同士が一緒になってプレゼンをしたりする活動があり、とても良い機会になった。」などの感想も複数寄せられた。共通コンテンツの内容を、ただ一斉講義により伝えるだけでなく、各担当教員が指導法を工夫し、「事例について実際に考えてみる」「ペアやグループごとに話し合う・伝え合う」といった、演習形式を取り入れて指導した成果として捉えられる。併せて、学生の「プレゼンテーションの方法の講義で学習したことを実際に授業に生かすことができたのでよかった。」などのコメントに見られるように、大学入門ゼミ全体の総括として「学んだことを整理する→発表原稿にまとめる→プレゼンテーションを行う」という学習の流れを構成し、共通コンテンツとして学んだことを実際に自らの学びに生かすプロセスを授業内で経験することにより、学習内容に対する学生の達成感・充足感をより高めることに繋がっていると考えられる。

併せて平成 30 年度の学生のコメントから、「日本語技法の点で、教員になる上で必要不可欠なことを学べた。」「教師になるから、正しく、分かりやすく日本語を使うのが大切だから、日本語技法はそれに役立つ。」「レポートの書き方やプレゼンテーションの練習ができたことは将来、自分が教員になった時に必ず生かされると思う。授業を行っていく中で、そういったところを生かして生徒にわかりやすい授業を作っていきたい。」など、教員を目指す本学部の学生にとって、共通コンテンツの学びを自らの将来像と結び付けて価値付けようとする学生の姿が認められた。大学入門ゼミにおいて、大学での学びに必要な知識・技能を獲得させる「共通コンテンツ」ではあるが、教える大学教員として、学生の将来像とこれらの学びをいかに関連づけ、意味づけていくか、学生から課題を与えられているようにも感じられる。

(2) 改善すべき点等

学生のコメントから、「全体的にタイトなスケジュールだったため余裕をもって行ってほしかった。」「これらのスキルは、将来にも直結するのでもうすこし時間をとっても良いと思います。」などの声が寄せられた。教育学部学校教育教員養成課程において開講する「大学入門ゼミ」には、共通コンテンツ以外にも押さえるべき内容があり、全体カリキュラムとのバランスを考慮し、共通コンテンツそれぞれの内容の精選を図る必要があるだろう。

一方、「よいレポートの具体例をプリントに載せてほしかったです。」「情報処理の具体例がもっとほしかった。」など、モデルとなる姿（結果）を明示してほしいとの声も複数寄せられた。より具体的には、「レポートの書きかたは実際に手本があった方がわかりやすいと思った。自分に身についたのかよくわからなかった。」との学生の声にもあるように、到達目標が明示されていた方が、自らの現状の改善点が明確になる、との指摘と捉えることができる。大学入門ゼミの共通コンテンツテキストや資料の改善も必要であると思われる。

また、共通コンテンツの中でも「レポートの書き方」については、時期を早めて実施しているものの、平成30年度の学生コメントには「・レポートの書き方の授業を受ける前に、レポートを書かなければならないことがあったので、レポートの書き方の授業をもう少し早めにすればよいと思う。」「1Qにもレポート課題があったのもっと早くレポートの書き方等を教えてほしかったです。」などの声に見られるように、全学共通科目におけるクォーター制の導入によって、より早い時期で「レポートの書き方」の知識・技能を習得しておきたいとの学生の声が高まっている。

今後とも、大学生として必要な内容の精選、本学学生の事例を挙げるなど授業法の工夫、ならびに、全学共通コンテンツ相互の連続性を持たせるなどの授業実施上の工夫を行いつつ、一方では学生の直近の必要性だけでなく、学生自身が「学ぶことの意味」を感じ考えられる授業として「大学入門ゼミ」を実施していきたいと考えている。

1. 実施の概要

***開講数、担当者数、クラス規模、共通コンテンツの教え方、担当教員間でのやり取りの仕方などについて記載してください。**

開講数：8クラス

担当者数：8名

クラス規模：20名程度

共通コンテンツ：取り上げ方や、回数については各担当者の裁量としたが、シラバスの記載などについては統一を行いました。また、図書館ガイダンスや法学部資料室の見学、そして法学部における講演会（香川県警の方による犯罪防止に関する内容）については各1回分の授業時間を使用しました。

担当者間のやりとり：基本的に、大学入門ゼミ実施部会委員がコーディネーターになり、シラバスチェックや、上記のガイダンス・講演会の日程調整を行いました。

2. 学生アンケート（共通コンテンツについてのアンケート）結果についての所見

***7月に実施する学生向けアンケートを踏まえて、所見をお書きください。アンケート結果は、修学支援グループからお送りします。**

学生からの意見で一番多かったのが、大学入門ゼミを自由に選択できないことによって生じる個々の担当者間で取り上げる内容の違いについてでした。この点は、現状の制度上はやむを得ないと思われませんが、今後は、1年生向けのガイダンスにおいて、個々の教員の教え方に違いが生じることをしっかりと伝達していきたいと考えています。

3. 教員アンケート結果（または反省会での意見交換）についての所見

***教員アンケート結果（または反省会での意見交換）について所見をお書きください。**

担当者からは、大学入門ゼミの教育効果についての意見がありました。この点については、現状、大学入門ゼミ担当者から基礎ゼミ担当者への教育内容の引継ぎ・FDの開催などが行われているわけではありません。そのため、法学部で開講されている基礎ゼミ（や2年次のプロゼミ）との関係なども踏まえて、教育効果を高める、あるいは、担当する教員の二度手間を防ぐ必要があると思っています。

4. 改善すべき点等

以上を踏まえて、「大学入門ゼミ」で改善すべき点があればお書きください。『大学入門ゼミハンドブック』についての意見でも結構です。

上記の学生からの意見および担当者からの意見は、双方共に、情報伝達をどのように適切に行うかが問題と考えています。それゆえ、学生に対してはガイダンス、教員（大学入門ゼミを当該年度担当していない教員も含む）に対してはFDを行うことで情報伝達を徹底していければと考えています。

なお、あくまでも小澤の個人的見解ですが、学生アンケートの中には、もちろん教員個人として改善を図るべき内容もあるものの、アンケートという名のもとに若干辛辣すぎるものもありました。この点について、実施機関としては、度を過ぎない程度で意見を書いて貰えるようにした方が良いと感じています。

大学入門ゼミ実施報告書（経済学部）

1. 実施の概要

開講数：17 クラス 担当者数：17 名 クラス規模：16 名

共通コンテンツの教え方、担当教員間でのやり取りの仕方などについて：特になし

2. 学生アンケート（共通コンテンツについてのアンケート）結果についての所見

- ・多くの学生が、レポートの書き方、メールの作成方法、プレゼンテーションの仕方を学ぶことができて良かったとの感想を述べている。
- ・情報整理の方法や日本語技法についての説明が不足していたとの指摘が複数からあった。
- ・情報リテラシーの講義と被っている部分があるとの指摘があった。
- ・ゼミによって負担や評価基準（履修難易度）に差があるとの指摘があった。

3. 教員アンケート結果についての所見

- ・アカデミックリテラシーだけを教えることはなかなか難しい。各教員が自分の専門に引き寄せて、アカデミックリテラシーを教えた方が、結果的には興味深い授業になるのではないか。
- ・教員の専門分野が多様であることを考え、学生が参加するゼミを機械的に割り振るのではなく、一定程度の共通コンテンツを教えつつも、学生自身がシラバス等を通して関心のある教員を選べる形式に戻すほうが良いのではないのか。

4. 改善すべき点等

- ・情報整理の方法や日本語技法についての説明が不足している点
- ・情報リテラシーの講義と被っている部分がある点
- ・ゼミによって負担や評価基準（履修難易度）に差がある点
- ・学生が参加するゼミを機械的に割り振る（特に学籍番号順により割り振る）点
- ・各教員の専門とは無関係にアカデミックリテラシーだけを教える点

以上

（文責：井上善弘）

1. 実施の概要

(1) 実施の概要

学生に対する希望調査により医学科学生を 4 ゼミ教員 5 名 (1 ゼミのみ 2 名) で担当、看護学科と臨床心理学科の合同で両学科学生を 3 ゼミ教員 6 名 (各ゼミ 2 名) で担当した (医学部全学生数 195 名、前期全 15 コマ)。

教員アンケート回答は 5 名、学生用アンケートは 142 名の回答であった。

(2) 共通教育スタンダードと各ゼミのテーマの関連・対応

香川大学共通教育スタンダード

- ① 21 世紀型社会の諸問題に対する探究能力
- ② 課題解決のための汎用的スキル (幅広いコミュニケーション能力)
- ③ 広範な人文・社会・自然に関する知識
- ④ 地域に関する関心と理解力
- ⑤ 市民としての責任感と倫理観

ゼミごとに下記のテーマで授業を行った。

「健康づくりバイキング」(宮武・鈴木ゼミ)

: 健康づくりのいろいろな内容・方法を理解し、自ら実践・説明・支援できるようになる。さらにグループで課題について適切に考察しプレゼンテーションを行うことにより、「② 課題解決のための汎用的スキル」に対応。

「感染症と感染制御」(坂東ゼミ)

: 感染症という課題を通して自ら学ぶことを理解するとともに、そのために必要な各種の技法を習得できるようになることにより、「② 課題解決のための汎用的スキル」に対応。さらにグループワークを通してお互いの意見を交換しながら、作業が進められるようになることにより「① 21 世紀社会の諸問題に対する探究能力」に対応。

「医療分野における X 線と放射線」(久富ゼミ)

: 自ら能動的に医学分野における放射線に関連する資料を調べ、放射線の種類や発生原理および、放射線の生体への影響および治療について説明できるようになる。資料をもとにした議論を行い、課題解決能力を身につけることにより「② 課題解決のための汎用的スキル」に対応。

「生物多様性と実験医学」(宮下ゼミ)

: 生命科学関連の課題発見に関して学生が自ら能動的に取り組み、グループで課題を考えプレゼンテーションを行うことにより、「① 21 世紀型社会の諸問題に対する探究能力」「② 課題解決のための汎用的スキル」に対応。

「患者との対話から学ぶこと」(峠・石上ゼミ)

: 文献検索、プレゼンテーション技術、レポート作成方法、将来の医療者として必要な患者との接し方、患者を取り巻く医療や保健制度についての知識を身につけることにより、「① 21 世紀型社会の諸問題に対する探究能力」「② 課題解決のための汎用的スキル」「③ 広範な人文・社会・自然に関する知識」に対応。

「双方向学習のスキルアップ」(清水・渡邊ゼミ)

: 倫理的態度・大学履修上のマナーおよび基本的学習スキルを習得する。さらに、より良い人間関係を築く対話的コミュニケーションをプレゼンテーションによる体験により、「① 21 世紀型社会の諸問題に対する探究能力」「② 課題解決のための汎用的スキル」「⑤ 市民としての責任感と倫理観」に対応

「医療における心理学」(川人・野口ゼミ)

: レポート課題や発表を通して、情報収集スキルやプレゼンテーションスキルを身につけること

により、「① 21世紀社会の諸課題に対する探究能力」に対応。また、心理学に基づいたコミュニケーション理論を理解するとともに、それを日常生活に活用するための技術を磨くことにより「② 課題解決のための汎用的スキル（幅広いコミュニケーション能力）」に対応。

（3）上記の内容についての実施形態

全学共通コンテンツに関しては、ゼミ担当各教員の判断により、シラバスに従い学生主体（グループワーク、学生によるプレゼンテーション等）のゼミが行われた。

各ゼミにおいて、

- ・学生が興味を持てるように、身近な例や、自分自身の人生や生活を振り返る機会を持たせた。
- ・前半で大学生としての基本を教え、後半ではその技術をどのように実践に活かすかということを感じさせるというテーマを通して教えた。習得した知識を活かす場面として学生にプレゼンテーションをおこなってもらった。
- ・昨年度の授業方法について検討し、必要に応じて修正を加えた。（2名で担当しているため）担当教員同士で話し合いを行った。
- ・グループワークを基本として学生を3，4名ごとに分けて班ごとに発表・議論・プレゼンテーション等をおこなった。グループワークの各手法についても解説を行った。初見等の対応を取った。
- ・担当する教員が代わったため内容を調整する必要があるため、担当箇所を変更した。
- ・2名の教員でコンテンツの配分を検討し、教授方法として、大型ポスティングを共に活用することでプレゼンテーション方法の一貫性を担保した。
- ・初回あるいは提出期限1ヶ月前に課題を提示することにより、課題レポート作成時間に余裕を持たせるようにしている。

（4）全学共通コンテンツの部分の評価方法について

それぞれのゼミでシラバスに従い、教員の判断により成績評価の評価を行った。

2. 学生アンケート（共通コンテンツアンケート）結果についての所見

（1）評価の高かった点

大学入門ゼミについては、スキルの取得、グループワークの意義について医学部学生の評価は基本的に高い。特に、毎年学生アンケート結果で共通したコメントとして、「メールの書き方」「レポートの書き方」「プレゼンテーションの方法」に関して、必要性が高いとの意見が多かった。また、医学部ゼミの特長として、英語論文等の文献を読みプレゼンテーションに使用すること、病院見学時における患者様との会話機会の設定でコミュニケーションを図ることができ学ぶことが多かったこと等があげられる。

（2）改善すべき点

日本語技法に関して、直接的な効果を感じていない学生のコメントが多かった。

3. 教員アンケート結果（担当教員からのコメント）についての所見

（1）一般的所見

- ・初年度教育の中で、学生の興味を引く内容を独自に設定できる部分もあり、将来につながり、良いと思う。
- ・少人数なので教えやすい。最後に簡単な小論文を書かせたが、短時間で意見をまとめる練習ができた。
- ・1年生は一般教養に追われ、医学的な内容に触れる機会が少ないので、専門教科につなぐウォーミングアップになってよい。考えをまとめて書く、調べる、発表するなど学びの基礎となる部分にフォーカスする学習スタイルは重要。

- ・他領域（心理と看護）学生を同時に教育するので、目標設定や授業構築でやや工夫が必要である。
- ・看護学科、心理学科のみの構成学生であることにより、授業への参加態度に特に問題は感じられなかった。看護学の教員の授業において、心理学科の参加態度は大変良い参加状況であった。

（２）大学入門ゼミハンドブックに関する所見

- ・大学入門ゼミハンドブックは（基本資料として）よくできている。
- ・絵（イラスト）を改善してほしい。
- ・資料となるパワーポイントの公開場所 URL をわかりやすく記載してほしい。

4. 改善すべき点

- 統一的なコンテンツを作成していただき、e-learning で受講してもらう方がよい。
- アクティブラーニングを使うかについて（専門家の）指導や助言が欲しい。
- まだ、入門ゼミコンテンツスキルが学内全域で周知されていないように思われる。学生自身が、メールの書き方も聞いたことがないという上級生がいる。リテラシーが整っていない高学年の学生達に教えることに負担を感じている。そういう意味では、大学の教員自身がリテラシーの重要性が共通理解されていない可能性もあると思われる。

大学入門ゼミ実施報告書（創造工学部）

1. 実施の概要

*開講数、担当者数、クラス規模、共通コンテンツの教え方、担当教員間でのやり取りの仕方などについて記載してください。

創造工学部創設により、4 学科 260 名から 7 コース 330 名への学生定員の大幅増加に伴い、開講数は 12 クラスから 16 クラス、担当者は 12 名から 16 名に増加した（1 クラスは 20 名程度）。授業の構成は、コース毎のガイダンスが 1 回、7 コース共通の 3 回の基礎講習（安全教育講習：香川県警察高松南警察署、保健教育講習：保健管理センター・高田純講師、図書館利用講習：図書館・叶井貫一郎リーダー）、残りの 12 回はそれぞれのクラス単位で共通コンテンツを用いて実施した。

2. 学生アンケート（共通コンテンツについてのアンケート）結果についての所見

*7月に実施する学生向けアンケートを踏まえて、所見をお書きください。アンケート結果は、修学支援グループからお送りします。

多くの学生がレポートの書き方、プレゼンテーションの仕方が学べて良かったと評価している。一方、スキル教育で改善すべき点に対しては、プレゼンテーションの指導をより丁寧且つ深く行ってほしいとの要望が多かった。

3. 教員アンケート結果（または反省会での意見交換）についての所見

*教員アンケート結果（または反省会での意見交換）について所見をお書きください。

16 名中 9 名より回答があった。

○共通コンテンツを教えてみて、考えたこと、感じたこと

学生が、レポート、プレゼンのスキルに対して思いのほか評価が高いことを実感した教員が多かった。

○共通コンテンツを教えるにあたっての工夫

多くの教員がワーク主体で教えることを意識して行っていた。

○大学入門ゼミハンドブックについて

○大学入門ゼミの教育効果

初年次教育としては効果的である。しかし、その効果は、2 回生以上の学生ではあまり見られない。効果が継続するよう繰り返して指導する必要がある。

4. 改善すべき点等

以上を踏まえて、「大学入門ゼミ」で改善すべき点があればお書きください。『大学入門ゼミハンドブック』についての意見でも結構です。

ノートの取り方、レポートの書き方、プレゼンの方法は、授業、実験等を通じて実践を積むことが重要である。それぞれの基本的事項は、複数コースで行い、その実践をクラス単位で行うようにすればより効率的であり、教員の資源を有効に使えるものと思われる。創造工学部では 3 回の基礎講習があり、その題材を活かしたレポートの作成、プレゼンテーションをグループワークとしてクラス単位で行ってもよいと思う。

大学入門ゼミ実施報告書（農学部）

1. 実施の概要

全16回のうち、実習2回(合宿、図書館)、講義14回、担当者6名、学生各25-26名を学籍番号で機械的にクラス割り当てを行った。共通コンテンツの教え方は特に取り決めはないが、各コンテンツと研究倫理を取り入れるように打ち合わせを行った。成績評価は簡易的なルーブリックを利用していただいた。また、不明の点については部会委員が窓口となりその都度対応に当たった。

2. 学生アンケート（共通コンテンツについてのアンケート）結果についての所見

全体的に高評価であった。

1、スキル評価

共通コンテンツが役に立ったとの評価であった

2、スキル改善

教員間で内容を統一した効果が得られた

3、そのほか意見

講義を選びたかったという意見はほとんどなかった

3. 教員アンケート結果（または反省会での意見交換）についての所見

1、共通コンテンツについて

教える内容の厳選が必要。学ぶべき内容が多く有意。予習復習を促しては。

2、工夫、反省

プレゼンをやさしく教えること。アイコンタクトをとる。実験系の内容を充実。

3、ハンドブックについて

高評価

4、教育効果

目的がはっきりしない。FD研修を実施してほしい。反復が必要。

5、改善点

もう少し少人数でもよいのでは？

4. 成績評価の標準化指針の運用について

指導内容、成績評価方法について担当教員間であつまって話し合った。昨年度の成績データを示し、農学部ではこの程度の成績が基準になることを示した。また、簡易ルーブリックを配布し、共通コンテンツの成績評価に利用していただいた。

5. 改善すべき点等

来年度は担当者がかかるので、引き継ぎの円滑化について検討の必要がある

文責 高田